

「隣人愛：持続可能な地球規模の共生社会を目指す」プロジェクト

一 桜美林中学校・高等学校

清水安三・穂子夫妻は、真の国際人を育てるとの理念を掲げ、桜美林学園を創立しました。以来100年、この思いを礎として継承。2017年にはユネスコスクールに加盟し、「隣人愛：持続可能な地球規模の共生社会を目指す」プロジェクトを立ち上げました。

建学の精神は、SDGsに通じる

「建学の精神がそのままSDGsの問題解決に通じる」と言い切るのは若井一朗教頭です。

真の国際人の育成を目指す桜美林中学校・高等学校の様々な活動は、社会（世界の）課題と向き合うことに繋がりが、ひいては自然な流れでSDGsについて考える機会となっているというのがその理由。伝統的な国際理解教育、英語教育、地域との連携といった活動と世界の課題解決のための行動とは一致するとの自信がうかがえます。

「隣人愛：持続可能な地球規模の共生社会を目指す」プロジェクトでも、SDGsのうち「平和」「環境」「国際」に関わるテーマにフォーカスして、中学の総合学習や高校の探究の時間でも取り組んでおり、「広く世界の人々に奉仕するために学ぶ」という学園のモットーからブレない姿勢が現れています。

平和

中学2年次の総合学習のテーマは「いのちと共生」で、今年は学園内にある畑でジャガイモやニンジン栽培しています。収穫に感謝していただくと同時に、収穫感謝礼拝



で奉仕委員の呼びかけて集まった献米と合わせて、NPO法人や日本基督教団神奈川教区寿地区センターを通じて野宿生活者のための炊き出し活動に供しています。夏休みには長野県飯田市の農家ででの民泊農業体験を通して、「いのちと共生」を身近なところから学び、外の世界へ少しずつ目を向けていきます。

またパラリンピックイヤーの今年、中学2年生は、6月の総合学習でブラインドサッカーを体験しました。またアイマスクをつけた生徒とその手を引いてガイドヘルプする生徒がペアとなって歩く、ブラインドウォークも校内で実施。他にも視野狭窄の眼鏡を作って、全盲だけではなく視覚障がいがあることを知る体験もしたそうです。3年生は、ポッチャの試合も実際に体験し、障がいのある人と健常者が一緒に楽しむスポーツへの理解を深め、パラリンピックへの関心を高めました。ブラインドサッカーの観戦は残念ながら中止となりましたが、パラリンピックに関心を寄せることで、相手の立場に立ち社会に貢献することを学んだようです。

今年5月、高校3年生の聖書ボランティアを選択している生徒9名は「SDG4（エス・ディー・ジー・フォー）教育キャンペーン2021」に参加しました。これは、SDGsのゴール4「質の高い教育をみんなに」を達成するための政策提言を考え、政府に届けようというもので、毎年世界約100カ国で同時期に行われています。主権者意識を育てることはもちろん、特に内進生にとっては中学で学んだ共生の理念が言葉になり、社会に還元できる場を見つけることにつながったのではないかと、聖書科の今村羊生文先生は振り返ります。

肌身をもってする経験や出会いによって、不問に伏してきたこと、困っていることに気づき、主体的に課題として捉えていくことが社会に関わる土台となる（今村先生）というのは、まさにSDGsを自分ごととして考えることに通じます。

いま、中学・高校・大学に至るまで、授業や行事、課外活動などで学び、考えていること一つひとつにフォーカスすると、SDGsの目標のいずれかに通じる（偶然にまたがることも）テーマを探求していることと表裏一体、教室での学びが世界に繋がっていることに気づきます。この連載では、地球規模の課題を抱える私たちに必要な協働・共生する力を育む、私学の取り組みと行動をご案内します。
市川理香



環境

中3では地域に視野を移し、環境にやさしい持続可能な街づくりを学ぶため、相模原・町田の「タウンマップ」を半年かけて作ります。商店街を取材し生の声を挙げて地図を作る過程で生徒は、自分の興味関心に気づき、情報を精査することを学びます。日本語版と英語版を作成するこの作業は、異文化交流や日本の他地域を知ることにもつながっているため、高校の探究活動への興味づけにもなると思います。

またユネスコスクール加盟校の多賀城高校（宮城県）と連携して、防災をテーマに学習をしています。これは2013年から始まった東北支援の「さくらプロジェクト」の活動が、学校と学校の連携に発展したもので、宮城県の防災研修会では桜美林の防災の取り組みを発表しました。

国立極地研究所の出張講座「地球環境変動を学ぶ南極・北極教室」のような、温暖化問題の最前線を学ぶ講演も行われています。「温暖化を止めるために二酸化炭素を排出しない生活を考えていきたい」「これからも私たちの未来のために考える行動をしていきたい」といった感想が寄せられたといえます。

桜美林中学校ではここ数年、入試の理科では、物理、化学、生物、地学を融合した問題が出されています。2021年は「環境問題」と「食料問題」だったのも、とても自然なことと思えます。

国際

中学3年生の春休みを利用したフィリピン・セブ島への短期留学が、2018年に始まりました（希望制）。英語の研修授業のない週末には、様々な事情を抱えて家族と暮らすことのできない5歳以上の女子がシスターと共に暮らしている「Our Lady of Divine Providence Home」という孤児院を訪問します。このプログラムに参加した生徒の発案で、文房具やTシャツを集めて寄付しようという運動も生まれたといえます。スラム街での配給も手伝い、現場で起こっていることを見て、自分でできることを考え行動した、一つの成果です。

現在、コロナ禍の影響で海外への渡航が難しい状況が続いています。そこでこの夏、オンラインプログラム「Global Study Tour for SDGs」が実施されました。カンボジア、フィリピンで働く日本人ボランティアや、現地の工場で働くスタッフとの5日間の交流プログラムに参加した生徒は、社会問題の解決に携わりたいと考える高校生15名です。「支援とは「何かを与えること」ではなく「一緒に活動すること」「自分がその問題に加担していないかどうかを深く考える大切さ」を学んだという感想のほか、教育の必要性への言及もあり、日頃の様々な活動がこれからの行動の土台を築いていることに確かな手応えを感じているようです。

SDGsは私たちに地球規模の課題を突きつけます。解決には愛のある行動が必要と教えてくれる桜美林の取り組みの数々です。

